

京の雅を偲ばせる 土佐一條公家行列



童(わらべ): 幼い男子



手振(てぶり): 従者



隨身(ずいじん)
身分の高い人が外出するとき、武装して警護の任にあたった人



馬副(うまぞえ)
馬廻りの警護役



一條公(いちじょうこう): 一條教房公



口取り(くちとり)
国司使の馬の世話役



くとり
弓矢を持った警護役



馬廻武士(うまわりぶし): 警護役



手明(てあき)
御用係



土佐国司使(とさこくしつかい)
現在の県知事にあたる土佐国の領主の使い



供奉(くぶ): 前方の警護役



雑色(ぞうしき)
一條公の御用係



侍女(じじょ)
平安衣装を纏った女性



玉姫(たまひめ)
伏見宮邦高親王第九王女であり教房公の孫嫁



童女(わらわめ) 幼い女の子



白丁(はくちょう)
白い衣装を着て、物を担いだ人



市女笠(いちめがさ): 物詣をする女性

居飼(いかい): 公家の馬の世話役
取物舎人(とりものとなり): 雑役に従事した官人
舎人(となり): 雑役に従事した官人



土佐一條家

応仁の乱を逃れ、中村に下向した一條教房公は、中村小森山を中心に御所を築き、街をタテ町、ヨコ町と拡げて碁盤目の町へと発展させていった。一條家は教房、房家、房冬、房基、兼定と、およそ百年土佐を治め、政治経済の中心として幡多、中村は栄えていった。房家より土佐国司となり、土佐一條家が成立することとなった。